

紀

要

第 13 号

2000. 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

中世における居館を中心とした集住形態

—安土町慈恩寺に所在する居館遺跡とその周辺—

村井毅史

1. 緒言

安土町慈恩寺に所在する金剛寺遺跡は15・16世紀代の居館形態を呈する遺跡で、条里地割1坪半の面積を占め、当該時期では滋賀県下で最大規模の方形単郭居館である。

この居館の周囲、差し渡し1kmの範囲には同時期の遺構群が10箇所程度分布していることが確認されている。

これはこの近辺にこの時期として他に類をみない密度であり、これらの遺構群は居館を中心に形成された集住の一形態であると見做すことができる。

これは16世紀中葉以降の観音寺城とその城下町石寺にみられる、城郭を中心とし、広大で稠密な部分によって中心が構成される集住形態が成立、展開することによって、近世的な地域構造が確立する以前の、居館を中心とした中世的な空間構造の最後の状況を示していると思われる。

よって本稿ではこの居館状の遺跡を中心とした集住形態について、近江八幡市の東部から安土町の西部にかけての範囲に視点を据えて、検討を試みることにする。

2. 慈恩寺館と居館集落(第1図1)

蒲生郡安土町大字慈恩寺の西部小字^{こんごうてら}金剛寺に所在する^{こんごうてら}金剛寺遺跡はその地名から寺院跡と考えられてきた。

また周囲に遺存する土塁の痕跡や堀の跡とみられる地割から城館跡とも考えられてきた。

過去において安土町金剛寺遺跡では4回の発掘調査が行われており、この結果遺跡の周囲から埋没した堀が検出されている。

1991年の山本川河川改修に伴う発掘調査においては、堀の南辺の一部と北東隅が、1993年のほ場整備に伴う発掘調査においては、堀の南東隅と東堀が検出され、居館形態を採用する遺跡であることがほぼ

明らかとなっている。

特に山本川河川改修に伴う発掘調査においては堀の一部を埋め立てて、埋立て部分と堀の境界を石積で護岸しており、この工事によって城館としての機能が否定され、小字名「金剛寺」にみられる寺院に転用されたものとみられる。

1) 居館

居館の周囲を廻っていたとみられる堀は、発掘調査によって北堀・東堀・南堀(第1図2)の存在が確認されている。

南堀は1991年、3年の調査によって確認されている。南堀は幅8m、深さ1mで、断面は逆台形状を呈する。南堀の方位はN-39°-Wで蒲生郡条里の方位より東に振っている。

東堀は1991年の安土町の調査によって北端が、93年の調査によって南端が検出され、その位置はほぼ明確である。

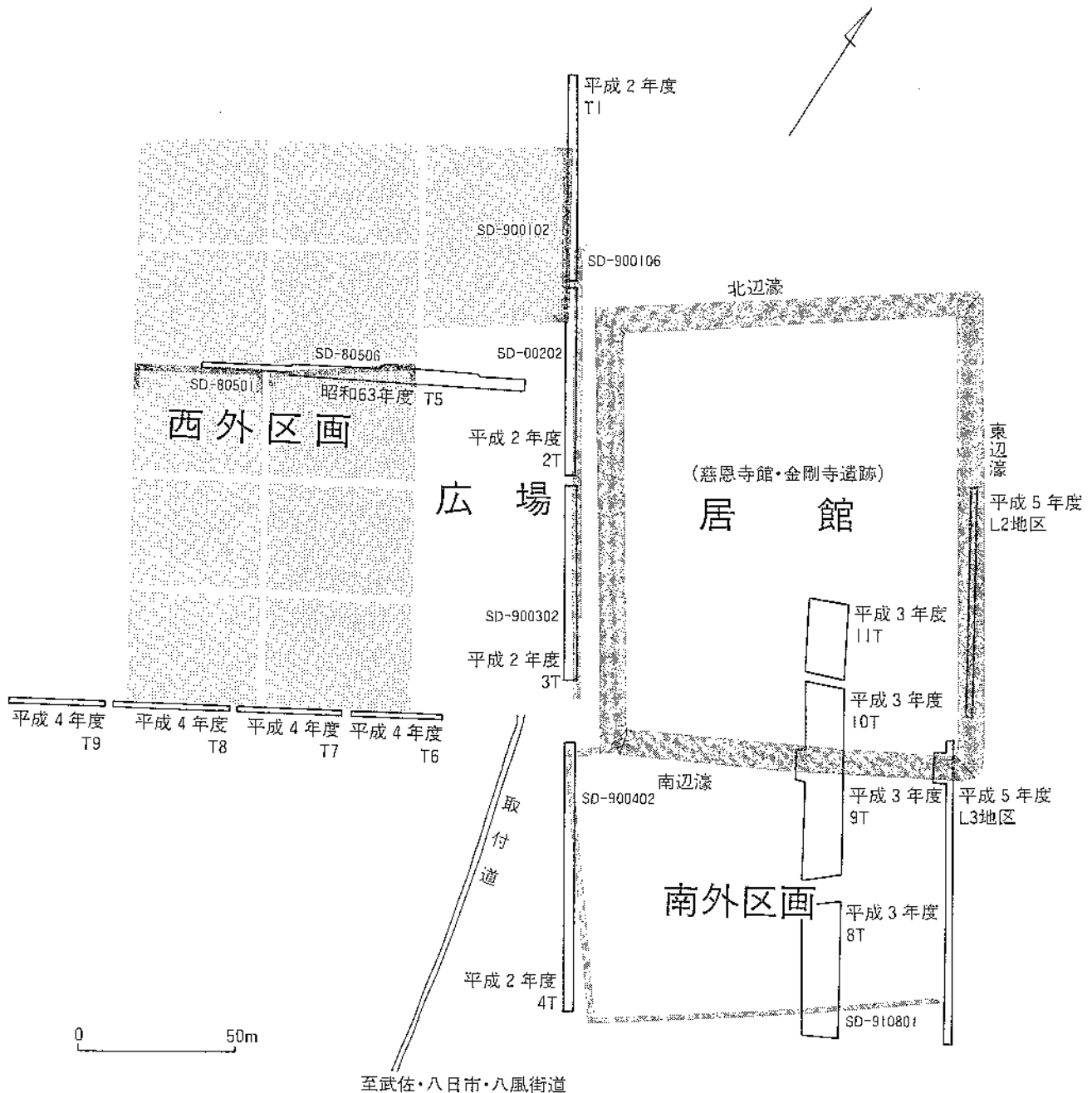
北堀は1991年に北東隅が安土町教育委員会によって発掘調査が行われているが報告書が未刊行のため詳細は不明である。

堀の平面形状を地籍図によって復元すると方位は南堀とは逆に条里方位に対して西に振っていたものとみられる。

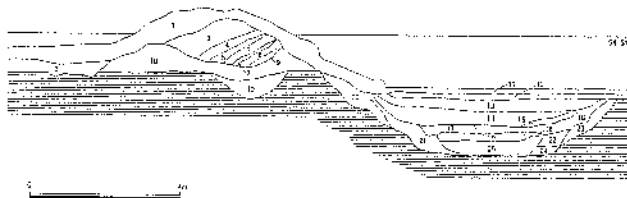
西堀については現在のところ全く不明であるが、1991年度調査区の東で恐らく旧琵琶湖揚水の水路と重複しているものとみられる。

居館の平面形態 以上のことから居館の規模と平面形態を復元すると西辺を短辺とする台形状を呈していたとみられる。その規模は堀内法で西辺130m、東辺140m、南辺105m、北辺105mで、堀内部の面積は14000と推定され、この周囲に幅8mの堀が巡らされていたと考えられる。

居館の築造主体—居館の規模から 慈恩寺館周辺で同時期の居館(単郭方形館)とみられる遺構を検出しこれと比較することによって慈恩寺館の位置付



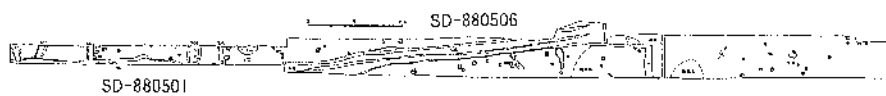
第1図 慈恩寺館及び居館集落推定復元図 (S = 1/2000)



第1図2 93年度10トレンチ西側断面図 (南土壘・濠) (S=1/200)



南濠西面石横 (S = 1/100)



第1図3 昭和63年度T5平面図 (1/800)

第1図 慈恩寺館及び居館集落推定復元図 (S = 1/2,000)

けを図りたい。

慈恩寺館周辺で規模等が明確にできる同時期の単郭方形館としては北から順に浅小井城跡（近江八幡市）、長田城跡（近江八幡市）、伝清光寺跡（近江八幡市）、後藤氏館跡（八日市市）がある。

これらの堀内法の面積をみると長田城跡、伝清光寺跡が約4500㎡、浅小井城跡が約5600㎡、後藤氏館跡でも約7500㎡であり、慈恩寺館はこれらの2～3倍程度の面積を有していたと知れる。

これらの居館主はいずれも六角氏の有力家臣であり、慈恩寺館が湖東地域において卓越した規模を有していたことがわかる。

このことはその築造主体を暗示しているように思われる。すなわちそれは彼らの主君である六角氏当主であり、居館として機能した時期を勘案すれば六角高頼である可能性が最も高い。

2) 居館集落

居館の周囲には同一方向、同一時期の遺構が分布しており居館の南側と北側に区画群を形成していたとみられる。

居館南外区画 南外区画は居館の南に接して形成され、東西130m、南北70～80mの規模を有するものとみられる。区画溝としては西辺からSD-910402が、南辺からはSD-900801が検出されている。

居館南堀と南区画の間には区画溝が掘削されておらず、他の区画よりも居館との一体性や、居館に対する従属性が強いとみられる。

この内部からは溝、ピット、土坑が検出されている。

土坑は不定形で大型のものと、一辺1～2m程度の隅丸方形ないしは、楕円形を呈するものに分けられる。

前者は多様な出土遺物の状況から廃棄土坑とみられ、後者は土壙墓である可能性が考えられている。また前者は後者に先行し、後者の年代は16世紀の中葉から後半代とみられている。

西部域居館外区画 西部域区画群については1990年度調査区1～3Tで検出されたSD-900106・0202・0302が一連のものとみられ、延長も140mに及ぶ長大な溝で、居館の推定西堀西肩から約8m離れて検出されている。

SD-880506は1989年度5Tから検出されたL字

形に屈曲することが確認された溝で、幅は1.7～2.5m、深さは0.4m、延長は東西部分が48m程度と推定され、東端は南に向かって屈曲し、西端も同様に屈曲しているものとみられ、区画の北部を形成していると考えられる。

SD-880501はSD-880506の西に続く東西方向の溝で20m分が検出され、西端は調査区外に伸び、東端は南に向かって屈曲しているものとみられる。

SD-900402は居館の南西から検出された南北方向の溝で、延長36m、北端は東に向かって屈曲し、南端も同様に屈曲している可能性が考えられる。

SD-900102・0201は南北方向の溝で、SD-910106・0202とは約2mの間において平行し、南北両端が確認されており、総延長は56mで、両端はここで止まるが、西に向かって屈曲し区画を形成していた可能性が考えられる。

以上のようにこれらの溝は、一辺の長さが36mから56mであり、或る一定の範囲を囲む区画溝である可能性が考えられる。よって次にこれらの溝の全体的な配置状況を検討する。

東西方向としては、南北経する溝の平行するSD-900106・0202・0302とSD-880506南北溝の間隔が約51m、SD-880506南北溝とSD-880501の間隔が約51mと等距離で、SD-880506東西溝の延長48mに近似する。

次に南北方向としては平行するSD-900402とSD-880501の間隔が約120m、SD-900402とSD-900106北端の間隔が約190mで、いずれもSD-900402の延長36mのそれぞれ3倍強、5倍強に相当する。

このことは居館の西に溝外法で、東西50m前後、南北36mを基準とする区画が割り付けられていたことを示すとみられ、端数分は道路敷きとみられる。

この区画割は居館西方に東西3区画分、南北6区画分を割り付けることが可能である。

SD-890506の東西行は全体の区画方位に対して斜行している。この東延長には推定居館北堀がほぼ同じ方位で存在しており、SD-890506は居館と一体的に計画されていたものとみることができる。

広場 居館西方は区画だけによって占められていなかったことは、SD-890506によって囲われる区

画の東側に区画が存在しないことで明白である。

更に91-T2・3の状況から居館の西に面する東西48m、南北150mの範囲には区画が存在しなかった可能性が考えられる(第1図3)。

よって、居館西面には広大な広場が確保されていたとみられる。

同様の居館に面する広場は岐阜市堀田・城ノ内遺跡でも認められる。広場は遺構群のほぼ中央に位置し、東は居館、西と北は区画群に面するとみられる。

この広場は、馬揃や、犬追物、騎射等の武家儀礼が挙行された馬場であると思われる。

また武佐から延びる「浄厳院道」がこの広場の南東隅に取り付いる。

「浄厳院道」は近世において八日市と常楽寺湊を繋ぐ道であり、伊勢から八風峠越えて湖東地域を結ぶ街道の延長でもある。

この道の成立時期は不明であるが、地形に沿って緩やかに延びる道が遺構群の広場に導かれていることは遺構群と同時に成立した可能性を示している。

遺構群の拡がり

安土金剛寺遺跡は、遺跡分布図からは小字金剛寺周辺の極めて狭い範囲をマークするに過ぎない。

しかし過去の調査から勘案すると更に拡がるものとみられる。

西は1989年のT5調査区から、時期が不明ながらも数条の溝が検出されており、これは更に西へ延びていたとみられ、居館の西180m付近で観察できる自然の落ちまでは拡がっていたとみられる。

南は1991年度8Tで検出された自然の落ちまで、東は1993年の調査で居館東側からは遺構が認められなかったことから居館東堀が東限とみられ、北は1990年の調査から条里坪境付近に自然の落ちが認められることから9・15坪境付近が北限と考えられる。

よって金剛寺遺跡の規模は、南北300m、東西300mの範囲に拡がっていたと考えられる。

以上のことからこれらの遺構群は居館を中心とした居館集落を形成していたとみられる。

居館集落の構造

居館集落は条里の坪境に位置するSD-910106・0202・0302とSD-910402を境に東西の構造が異なっている。

東部は居館を中心とした東西130m南北240mの規模を有する範囲で、15世紀から16世紀に至るまで機能した。

これに対して西部は東西150m、南北190mの規模を有し区画と広場によって構成されている。

区画は居館の主体に従属する階層の屋敷と推定されるが、遺物の出土がほとんど認められないことから短期間で放棄されたものとみられる。

この性質の違う2つの空間を接続していたのが、居館集落の中央に設けられた広場である。

居館集落の形成と条里地割

居館集落が立地する部分には居館成立以前に条里地割が存在していた。条里地割は居館形成に伴ってどのように継承、否定されたのであろうか。

居館の位置は蒲生郡統一条里の6条27里3坪を中心とした範囲で、西辺を除く3辺はいずれも条里の坪境線は無視され、これを越えて北堀・東堀・南堀は設定されている。

特に北堀と南堀は条里地割の方位さえ無視して設定されている。

南外区画の位置は6条26里33坪に相当するが西辺は条里の坪境を西に越え、方位も条里より西に振っている。

以上のように居館集落は3・4坪の境を基準に、この東を居館域、西を区画群域とし、区画群域の南辺を条里の4・34坪境に設定している以外は全く条里地割を無視している。

居館集落の廃絶

平成3年度の山本川河川改修に伴う発掘調査において検出された南辺堀は、或る程度の期間堀として機能した後、この一部を埋め立てて石垣で護岸していたことが明らかとなった(第1図2)。

堀の埋立て部分は延長10m分が検出され、更に西に向かって拡がることが確認されている。

堀を埋め立てるという行為は、居館の防御機能を有する居宅としての存在意義を否定するものであって、居館としての機能の停止を意味するとみられる。この行為は金剛寺遺跡が居館から小字名にみられるような寺院に転用されたことを示すものと考えられる。

よって居館集落の西半部は、居館の機能が停止す

るとともに放棄され、東半部はこれに伴い寺域と墓域に改変されたとみることができる。

3. 外辺に分布する同時代遺構群（第2図）

次に居館集落の周囲を高状に取り囲む同時期の遺構群についてみてゆきたい。

一般に当該期の遺構は検出例が少ない。このことについては14世紀頃に現集落の原形が形成され14世紀以降の集落は現集落と重複しているためと考えられている。よって15・16世紀代の遺構は特徴的な存在であるとみられる。そこで慈恩寺遺跡周辺で15・16世紀代の遺物が出土するトレンチをピックアップしてゆき、その分布傾向をみてゆきたい。

居館集落を中心とする差し渡し1kmの範囲内には同時期とみられる遺構群が10地点で確認されており、更に同時期の可能性の高い残存土塁が1個所存在している。これらを含めて、慈恩寺館を中心とした周囲に居住群が形成されていたとみられる。

a. 慈恩寺

現在の淨嚴院は当時六角氏の菩提寺の一つ慈恩寺であった。慈恩寺は条里地割の4坪分の寺域をを構えていたとみられる。発掘調査の結果、中世前半代のものともみられる軒丸・軒平瓦が出土しており、15世紀代以降の遺物も出土している。

文明元年には慈恩寺で合戦がおこなわれた。（『小佐治文書』『近江蒲生郡志』所収）、「応仁記」-近江越前軍之事-にみえる文明3年高頼老臣佐々木新左衛門尉入道勝綱が自害した威徳院も慈恩寺の周囲にあったものとみられる。

慈恩寺は『寛永諸家譜』の定綱の項に「慈恩寺西御堂の本願なり」とあり定綱によって創建され、同氏頼の項に「慈恩寺戒律の本願なり。亡母十三年忌のため塔を造立す。塔並金剛寺・威徳院三ヶ寺の本願なり」とある。また威徳院には応仁の乱の折に六角方の陣が置かれ周辺一帯が戦場となっている。これらは発掘調査の結果とほぼ一致するものである。

慈恩寺は慈恩寺館の北東に位置し鬼門除けの役割を持っていたと思われる。

b. 加茂地点（北部城区画群）

平成5年度ほ場整備関連調査A・F地区より当該期の遺物が出土する溝等が検出されている。遺構が

検出された範囲はA地区で90m、F地区で55mである。

A地区は景清道に沿って設定されており、このすぐ北が高低差1m程度の段差となっているのでこれが北限であるとみられる。また西には自然の落込がありこれより西に遺構は拡がらない。

区画溝とみられる遺構としては幅1～3mのSD1・2・6・8が検出されており、このうちSD1・2間と、SD2・6間はほぼ等距離で26mあり、これは1坪の1/4の長さに相当し、これを規格とする区画が施行されていたとみられ、加茂地点は蒲生郡条里の6条里17.21坪に相当し、SD1は20.16坪との境界である。

出土遺物に瓦が混じることから慈恩寺に関連する遺構群であるとみられるが、居館との間は削平・土取・攪乱が著しいため遺構も遺物も検出されておらず、加茂地点が居館と連続していたかどうかは不明である。ただSD1の南延長に、居館東堀が位置することから両者の関係をまったく無視することはできない。

これらの区画は景清道が造成される以前に既に存在しており、SD8は景清道の造成に伴って道路敷になる部分が埋め立てられ、その境界に石を積んでこれより南は溝としての機能を維持し続けていたとみられる。

またF地区より検出されたSX-31は土師器焼成窯と推測されている。

c. 大町地点

1988年度・1992年度にほ場整備に伴う発掘調査が長田町大町集落の南辺で行われ15～16世紀代の遺物が出土する溝・土坑が検出されている。

長田町大町は朝鮮人街道沿いの集落で、慈恩寺居館集落から北西に150m離れた微高地上に立地しており、地形的にも居館集落と一体性の強いものである。

大町に関しては「大徳寺文書」（『蒲生郡志』所収）の売地券に「大町地藏堂講衆先祖伝来の私領…」とあり16世紀初頭には既に「大町」と呼ばれていたことが知られる。

「大町」の地名は、規模を示す「大」と、「村」とは異なる非農村的な集住形態を示す「町」が複合し

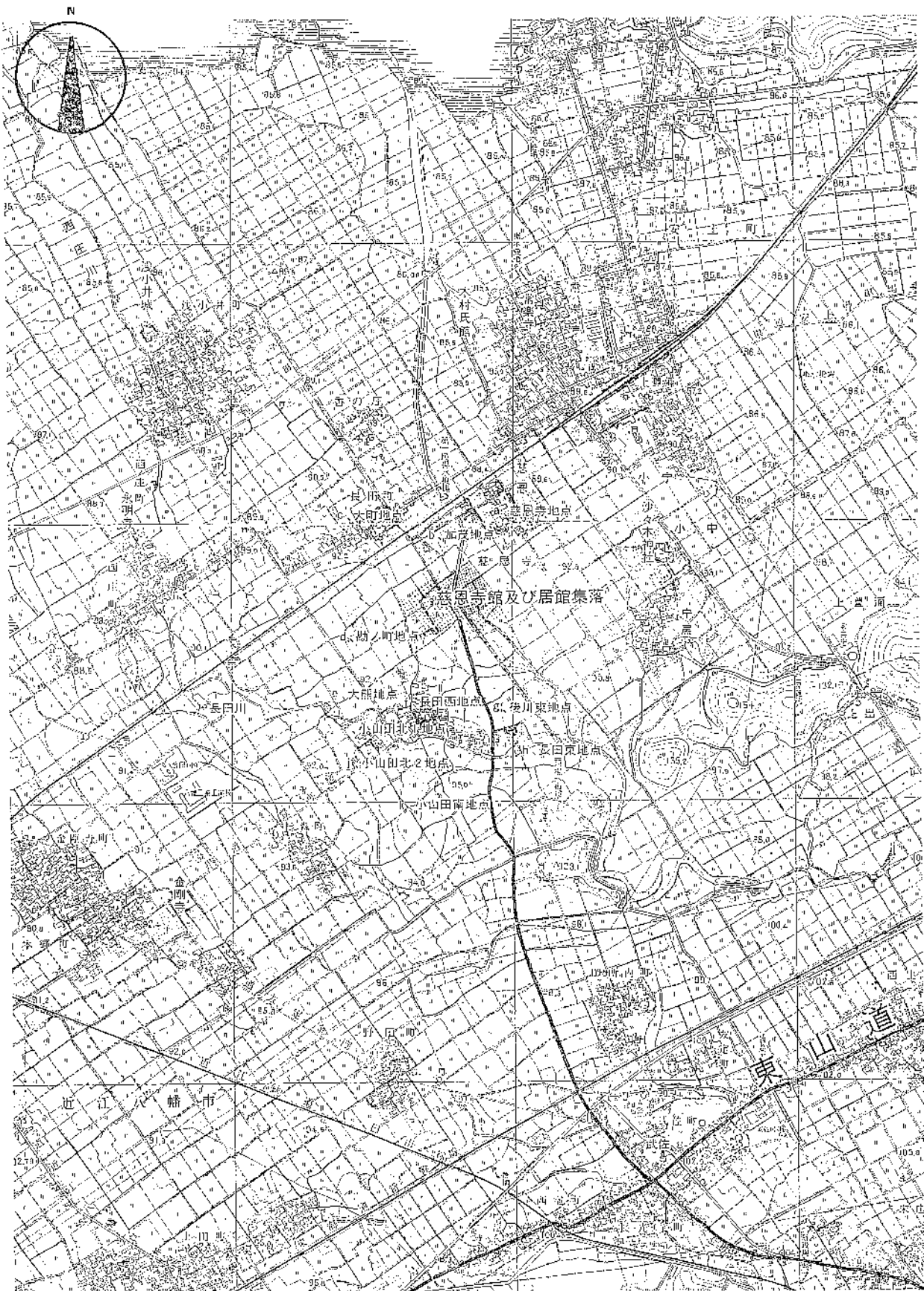


図2 慈恩寺館周辺15世紀後半～16世紀初頭遺構群配置図 (S=1/2,000)

て形成されたとみられる。

よって、土地の形状や様相から転化した自然発生的な地名では無く、意図的に呼称された地名といえる。

また、調査区からは甕の羽口が出土しており手工業者の居住が推定される。

また豊郷町の高野瀬城北方にも「大町」が認められ、ある程度大規模な居館には大町が付属していた可能性がある。

d. 勘ノ町地点

ほ場整備1988年度調査T 6 から数棟の掘立柱建物跡が復元される。また周囲の地割方位も蒲生郡条里とはやや異なり一定面積の屋敷地の存在をうかがわせる。

e. 大熊地点

県道下豊浦鷹飼線道路改良工事に伴う後川遺跡のN 5 トレンチBから当該期の遺物が出土する区画溝が検出されている。

この溝は幅が0.3~0.5m、深さ0.3m程度で、一辺36mの区画を形成しているとみられる。

これは条里地割一辺の1/3に相当する長さであり、条里に規制された環溝屋敷が存在したとみられる。

f. 長田西地点

長田西地点は居館集落の南西300mに所在する伝長田城を中心とした居館集落とみられ、その規模は200m四方に及ぶとみられる。

この北西部からは居館集落の一部を構成するとみられる溝によって区画された屋敷地の一部が検出されている。ここからは16世紀以降の遺物が出土している。

g. 後川東地点

ほ場整備1988年度調査T 12の発掘調査によって当該期の土師皿が出土した区画溝が検出されている。

区画溝は幅2.2m、深さ0.4mのもの(S D 2)と、幅1.1m深さ0.25m(S D 3)のものが検出されている。

h. 長田東地点

発掘調査は行われていないが、長田町集落の東端に東辺と南辺を土塁がL字状に廻る周囲より高い土地区画が存在する。

土塁は底辺3m程度、高さ1m程度が遺存してお

り、地形は東西70m、南北65mの規模を有しており、居館の痕跡とみられる。

土塁は東辺南東隅近くが幅3m程切れており虎口の痕跡とみられる。

また南辺中央には南への突出部があり、これが当初の形状を残すものであるとすれば横矢掛を意図したものと考えられ16世紀代のものとみられる。

i. 小山田北1地点

ほ場整備1989年度T 1 から15~16世紀の遺物が出土した溝が検出されており、溝によって区画された屋敷跡の存在が推定される。

j. 小山田北2地点

ほ場整備1992年度調査B区T 16から当該時期の遺物が出土している。

近江八幡市教育委員会が平成元年に実施した後川遺跡1次調査区から幅2mの区画溝とピット等が検出されている。

また県道下豊浦鷹飼線道路改良工事に伴う発掘調査で区画溝や建物跡が検出されている。

k. 小山田南地点

居館集落の南南西600mに所在する。河川改修工事昭和63年度B区からは区画溝によって圍繞された屋敷跡が検出されており、出土遺物から15世紀後半~16世紀前半代の年代が与えられている。

区画溝は幅0.7~2.0m、深さ0.5~1.0mである。

また、ほ場整備平成4年度調査B区T 22からは区画溝によって画された墓域が検出されており、これらは同一の区画を形成している可能性が考えられる。区画の規模は東西50m以上南北×70m弱あるとみられる、墓域が付属する点から寺院である可能性が考えられる。このなかには近畿地方では類例の少ない地下式土壙墓が検出されている。

この地点は慈恩寺館の南西に位置しており裏鬼門を意識して設けられた施設である可能性がある。

4. 慈恩寺遺構団

以上のように15・16世紀代の遺物を出土するトレンチは後川遺跡から慈恩寺遺跡、高木遺跡、中屋遺跡に跨って分布するが、隣接する金剛寺遺跡や後川遺跡の南部、慈恩寺遺跡の東部には認められないことから、この範囲に特徴的な現象であるとみること

ができる。この範囲は差し渡し1kmに及ぶ。

またその内容としても居館及び居館集落、六角氏の菩提寺、墓を伴った区画、環溝屋敷、「町」と呼称され、少なくとも手工業者が居住したとみられる集住形態等、多様なものを含んでいる。

この中で慈恩寺館（安土町金剛寺遺跡）とその居館集落は、規模的にも、位置的にも中心的な位地にある。

慈恩寺館の主体は、居館の卓越した規模、位置からみて当時の六角氏当主、六角高頼である可能性が考えられ、この周囲に形成されたこれらの遺構群はこれに関わる集団の施設であるとみられる。

また文献からも六角高頼が当主として関わった、応仁の乱、2度の六角氏征伐では、当遺構群を含んだ近江八幡市金剛寺町から、織山に設けられた観音寺城の間で激戦が繰り返されており、当時当地域が六角氏の湖東地域における拠点であったことを示している。

遺構群には六角氏当主の居所が慈恩寺館から「石寺」或いは、観音寺城に移転するにしたがって廃絶したもの、後川遺跡では六角氏の有力家臣である永田氏の居館長田城を中心にして小規模に再編成されたもの、その他があるとみられる。

16世紀前半代に廃絶するものは前者に属し、これ以降も継続するものは後者に属すとみられる。

例えば後川第6地点の環溝屋敷は長田城に近接しているにもかかわらず16世紀前半に廃絶したとみられている。

慈恩寺館を中心とする遺構群の拡がり、観音寺城とその城下町のような城郭を核とした一門的で広大な集住形態が成立する以前の、大規模な居館を中心とした集住形態を示していると思われる。

このうち慈恩寺は六角氏の菩提寺であり、恐らく大町も六角氏と関わりのある町場とみられる。

これに対して、長田西地点は永田氏と、高木地点は高木氏と、土屋敷地点は香庄氏との関係が想定される。

また、慈恩寺館に対して慈恩寺（地点）は鬼門に相当し、土塚墓が検出された小山田南地点は裏鬼門に相当する。

また「大町」地点は居館の北に位置すが、高野瀬

城の北にも「大町」が所在しており、このことは遺構群全体の配置が何等かの理念の下、計画的に為されていた可能性を示す。

6. 結 語

この周囲には居館に隣接して同方位の区画溝をはじめとする同時期の遺構が分布しており、居館を中心とした集落が形成されていたとみられる。

またこれらの遺構群は、慈恩寺館の周囲に密着して設けられた居館集落と、この周囲に散在的に分布する遺構群に分けられ、慈恩寺館を中心とした二重構造を形成していたとみられる。

慈恩寺館（金剛寺遺跡）は当時最大の居館で、このように、慈恩寺館を中心にして居館－居館集落－外縁施設群が同心円を描いて、分布していた。

慈恩寺館は、六角氏が16世紀における近江の地域権力として確立してゆく端緒を開いた拠点であったとみられる。

この成果は「観音寺・石寺」に移植され、更に「安土」「（近江）八幡」へと続く湖東地域における近世都市の母胎となった「常楽寺」を生み出す。

慈恩寺館を中心とする遺構群はこの系譜の始祖に位置する存在であり、慈恩寺館を中心とするこのような同心円構造は、中世末期の居館を中心とした集住形態のひとつとみることができる。

参考文献

- ・県教委・県協会「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X-5-1」 1982
- ・県教委・県協会「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XVI-2高木（浅小井）遺跡」 1989
- ・県教委・県協会「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XVII-6高木遺跡・後川遺跡」 1990
- ・県教委・県協会「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XVIII-7金剛寺・後川遺跡」 1990
- ・県教委・県協会「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XXI-6後川遺跡」 1994
- ・県教委・県協会「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XXIII-7慈恩寺遺跡ほか」 1996
- ・県教委・県協会「県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書VII-2慈恩寺・金剛寺遺跡・後川遺跡」 1992
- ・県教委・県協会「県営かんがい排水事業関連遺跡発掘

- 調査報告書 IX-4 慈恩寺・金剛寺遺跡』 1993
- ・ 県教委・県協会『長命寺川（蛇砂川）中小河川改修工事関連埋蔵文化財調査報告書2 金剛寺・後川遺跡発掘調査報告書』 1990
 - ・ 近江八幡市教委『近江八幡市埋蔵文化財発掘調査報告 X X I』 1990
 - ・ 金子拓男・前川要編『守護所から戦国城下へ』 1994
 - ・ 愛知県埋蔵文化財センター『清洲城下町遺跡 V』 1995
 - ・ 岐阜市堀田土地区画整理組合・岐阜市教育文化振興事業団『堀田・城ノ内遺跡 II』 1997

編集後記

今回は執筆者数が少なかったものの、縄文時代から中世までの論考、および平成11年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会で発表された基調講演をまとめ、文章化したものを掲載できました。

来年からは21世紀となりますが、これまで以上に文化財の調査・研究が行われ、世の中に「文化財の保護」の意識が広がっていくことを願っています。(T. S)

平成12年3月

紀要 第13号

編集・発行 財団法人滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780・9781

印刷・製本 宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
TEL(077)533-1241 FAX(077)534-0846